

婦人と子ども 第一卷第九號

(明治三十四年九月五日)



(本欄は凡て
轉載を禁ず)

丈助の忠義(ついで)

やまとの翁

所が暫たちますと案の通りお姫さまの顔色がだ
んぐ青くなつてきて、と一ぐ其處え倒れてしま
ったのです。けれどもこの時わ、皆がお酒に酔つて
騒いで居るのですから 誰も氣の付く者わない。そ

こて丈助わいきなり飛んで行つてお姫さまを抱いて來て別間えお連れもーしたがもーお姫さまわ息が絶えくです。

けれども丈助わ烏に聞いてるから別段にあわても騒ぎもしません。靜にお姫さまを寝かせてそれから烏の言つた通りお姫さまの胸から血を三滴だけ吸い出して捨て、仕舞いました。所が如何にも不思議です。お姫様の顔の色がだんくもと通りにお直りになつてご気分もすつかりお直りになりました。

この様な譯をご存じのない若殿様わ 前程から丈助のして居たことをご覧になって 大變にお怒になりました すぐ他の家來をお召しになり 「丈助といふ奴わ まことに不埒じゃ すぐ牢屋え 入れて 縛つて置け」とお言ひ付けになりました。 さて翌日になりましたと 可愛相にこの忠義な丈助わ 牢屋から引き出されて 一應お調の後で 絞首臺の上え載せられました。そこで も一お所刑が始まる一とゆ一時 丈助わ若殿様に向いまして 「あ暫く……暫らくお所刑をお待ち下さいまし。も

「私もこの年まで奉公を致しましたので只今命を捨てましても少しも惜しいことがござりませぬが たつた一言申し上げて置きたいことがござります どーかお聞濟を願います』で殿様わ
 『おー何なりとも申せ 苦しゅうない』とお許になりました。

丈助わ 覺えず流れ落ちる涙を拭い 『ご存じがあらりませぬから 更々ご無理とわお怨みわ致しませぬが このお所刑わ間違です 私は一度だって不忠を致した覺わござりませぬ こんどの一件も申し

上げねばお分りになります。すまいからこゝで始はじから終しままで申し上げましたよ。」

それから丈助じゆすけわ船ふねの上うへで聞きいた鳥かかしの咄はなから馬うまを撃うち殺ころしたのもまた今度こんどお姫様ひめさまの胸むねの血ちを取とつたのも皆鳥みなからすのいっただことを聞きいて殿様とんさまご夫婦ふうふをお助たすけする爲ためであつたことやそれから自分じぶんわこれこれを咄はなせばも一石いしになつて仕舞しまつて二度ふたと人間にんげんになつて忠義ちゆうぎをすることが出来できないのだとゆゝことを申し上げました。

これをお聞きになつた殿様とんさまわ驚おどろいたの驚おどろかない



のって 『オー』 そーだ
ったか 何事も余が知
らなかつたからじゃ
許して呉れ 許して呉
れ こりや 誰か丈助
を 勞つて つれて行け
い』 と仰せられたです
が あわれ
丈助わお終の一言をゆ
いとすぐ 身体が固く

なつてとーどー石いしになつてしまいました。

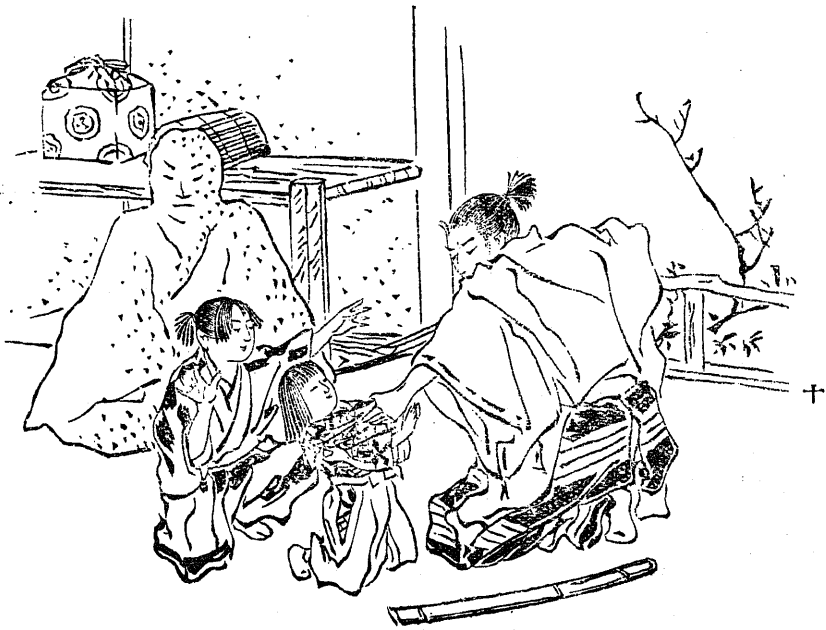
で殿様とのさまもお姫様ひめさまも大變たいへんお歎なげまになりました。非常に
 殘念ざんねんがられました。が、もーお取返とりかへしがつかせせん。致いた
 し方かたなく丈助じやうすけの石像せきざうを御居間ごいまえ祭りまして朝夕あさゆい
 これを御覽ごらんになつてわ涙なみだを御流ごながしになつて「嗚呼ああ
 丈助じやうすけやも一度いちど生き還かへつて來きて呉くれないかねー」と
 いつて何遍なんべんも繰り返かえされて居いました。

それから何年なんねんか経こちましてお二方ふたかたの中なかに可愛かひ
 いお子こさんが二人ふたりまでお生まれになりましたが、或ある
 日ひお姫様ひめさまわお寺てら參まりにお出でかけになつた留主ま中ちゆう

二人のお子さんたちわ 御殿でお父様のお側で 面白くお遊びになつて居られます。そこで殿様わ 例の石像を見上げられてまして 『嗚呼丈助や どうかしても一度生き還つて呉れないかね』 と仰せられました。 しますると不思議なるかな この石像が忽ち物を言ひ出しました。『ハイ殿様 それほど仰やつて下さるなら あなたが一番お大切の物を私に下さい ますれば 私はすぐ生き還ります』 殿様わこれわ不思議だと思し召されましたが 何が 偕大變なお喜で 『あゝ上げるとも 上げるとも お前の爲ならなん

でも上げる。と仰せられる。すると石わ『でわ、あ
なた御自身でそこに遊んで居らっしゃる。お二人
のお子さんの首をお斬りになって。その血を私の身
体に注ぎかけて下さい。すれば私わ生き返ります』
さすがの殿様もこれにわ驚ろきました。可愛い
二人の子を。どしして自分で手にかけて殺すことが
出来よー。いくら何でもこれ許りわ。と思し召され
たが。また思い還されて。いや。そーでわない
丈助わ。忠義のために死んだのだ。吾々を助けるた
めに。自分の身を石にして仕舞ったのだ。さすれば

今丈助を助ける爲ならば
ば どんなことでもし
なければならぬ。まし
て たった今何でも呉れ
て やると約束までした
の だ あゝ仕方がない
小供わ可愛そーだが忠
義な丈助を助ける爲だ
と こゝに覺悟を決め
られて やがて短刀引



き抜き なんにも知らないで 側に遊んで居られる
二人のお子を引き寄せて 流れる涙を拭いもあえず
兩の眼を閉ぢ南無の聲と共に お二人の首を切り落
としました。

さて 其血をしぼって石に注ぎかけるが早いか
丈助わ忽生き還って殿様の前に平伏致しまして

『あなたの御信心によつて 私は又生き還りました
この御恩還しわ きつと致します』と申しまして
今斬り落された二人の若様の御首を拾い上げて そ
れそれもとの通りに次ぎ合せて そこいらに流れて

居た血を注ぎかけました所が 不思議なるかな 死
 んだと思ひしお二人の若様たちわ 忽ムツクリ起き
 上りました 今までのことわさっぱり 何もござん
 じなかつたかの様に きやくといつて遊んで居
 られます で殿様の御喜わ 申すまでもなく 大變
 なご満足でございます。 所えお姫様が、お寺參からも
 ーお歸になられたとゆーお知らせが ございました
 ので 殿様わ早速、丈助とお二人の若様とを 次の
 間えお隠になりました。 お姫様わ夫とも御存じがあ
 りません お歸になりましたして殿様に御挨拶を致しま

して、さて申されますにわ、『私わお寺え参りまして、
も、丈助のことが心配で心配で堪りませなんだ。あ
んなに忠義だったのに、大變な不幸な目に遇せまし
たかと思ひますと』そこで殿様わそしらぬお顔で
『そーさ私も毎日歎いてるたがね………時にこーゆー
話があるがそなたの心わどーかね、丈助をも一度生
き還せよーとゆーのだ。但しそこに困ったことがあ
るので弱る、そーするにわ、あの可愛い若を二人な
から殺さんければならぬだかのー、一つそなたの考
を聞きたいのだ』お姫様がどーお答になるかお試し

なすたのです 所がお
姫様は 若様をお二人
とも殺すとゆーのをお
聞になられて 忽お顔
の色を眞青にして 驚
かれましたがやがて深
くご決心の御様子で
「我夫様 致方がござ
りませぬ 貴方も私も
丈助に助けられたれば



こそ　こゝして居られるのです　子供わ可愛相です
が、丈夫の爲ですと、お答になりました。

で、殿様も　このお答が丁度ご自分のお考と一所で
したから大變御満足で　いきなり次の間の障をお明
けになりました所が　三人が左も樂そゝにそこへ出
て参りました。一、生石でお終になると思つた忠義な
丈夫、わ生き還りまするし　不憫ながらも殺さなければ
ばならぬと覺悟されたお二人の若様も　この通りお
丈夫であるのをご覽になつて　お姫様わまゝどれば
とお喜びなすつたでしよ。

さて これから後丈助も 相がわらず忠義で長生
致しまするし お二人の若様も段々ご成人遊ばされ
まして 皆が楽しく面しろくご繁昌でお暮になりま
したとさ なんとお目出度お話しでわありませぬか。

(おしま)

